５　家族としてできること

家族としてできること

地域の家庭教育支援者の存在も大切ですが、親たちにもっとも近い存在である自分の親や兄弟（子どもから見ると祖父母やおじ、おば等）の家族が支援者として家庭教育を応援していくことが大切です。

（1）家族だから関わり過ぎてしまうこと

「目に入れても痛くない」と例えられるほどかわいい孫やおい、めい。

かわいさのあまり、ついつい口を出してしまうことはないでしょうか。家族は、自分の経験をもとに、いろいろ親にアドバイスをしてくれます。それが、親の思いや考えと一致していたり、親が素直に受け入れられるものだといいのですが、往々にして、そこに隔たりがあると子どもたちには、迷いや不安が生じたりすることがあります。家族として子どもを思う気持ちがあるからこそだと思いますが、親に第一義的な責任があることを肝に銘じておきましょう。また、祖父母世代と親世代では、子育てを巡る環境や方法も大きく変化してきています。そのことを理解して、親と子どもに接することが大切です。

（2）祖父母・家族に求められる親への支援

祖父母には、親にない経験があります。経験から培われた知恵や技で親を支援してあげましょう。ただ、孫は自分の「子ども」ではありませんから、「孫で、子育てのやり直し」はできません。自分の子どもを信じて、祖父母は応援団に徹しましょう。

忙しい親に代わって、自分の子どもが好きだった絵本を読み、親の子どもの頃について話してあげるのもいいかもしれません。祖父母だからこそできる関わり方を探してみましょう。

また、祖父母のほか、おじやおば等を含め家族だからこそ、親を理解し、支援できることがあります。特に現代は、働く女性が増えています。親の仕事と子育ての両立をサポートするなど、困った時に手助けすることができるような支援が親にとっては大きな心の支えにもなります。大切なことは、親の気持ちに寄り添うことです。

＜参考資料＞

岐阜県では、祖父母が孫やその親と良好な関係を築きながら、子育てのよりよいサポーターとなってもらうための冊子「孫育てガイドブック」を発行しています。近年増加している祖父母世代からの孫育てに関連した相談事例をもとに、子育てに関する世代間ギャップを解消するためのノウハウや、現在主流の育児方法等を紹介しています。どうぞ、参考にしてください。

『孫育てガイドブック』～孫でマゴマゴしたときに読む本～

https://kosodate.pref.gifu.lg.jp/?act=information_s_papa

＜孫で「子育て」のやり直しはできません＞

わが子に「もっとこうすればよかった」という思いが、孫に向かってしまう祖父母は少なくありません。しかし、自分の娘や息子が期待通りの進路を進んでくれなかったらからといって、孫に期待にするのはお門違いです。

「孫で、リベンジを！」という意気込みは、孫にとっても、あなたの子どもにとっても迷惑でしかありません。あなたの育てた子どもを信頼しましょう。期待通りではなかったかもしれませんが、もう立派に『人の親』になっているのですから。

＜『経験』があるからこそ、親の良きサポーター役に＞

２歳頃になると、「イヤ」「ダメ」という言葉を覚え、親の言うことを聞かずに、わがままをいうようになってきます。これは『自我の目覚め』で必要な成長の過程なのですが、親たちは喜ぶどころか「子育てが間違っていたのではないか」と不安になったりします。怒鳴ったり、たたいてしつけしようとする親も出てきます。祖父母は、こうやって成長していくのだということを知っていますが、経験のない親にはわからないことなのです。

そんなときこそ祖父母の出番です。不安な親に、「いい子に育っているよ。大丈夫だよ。」と声をかけてあげましょう。親だってほめられるのはうれしいものです。気分が良くなって子どもとの接し方にもゆとりが出てきます。「育て方が悪い」と親を責めたりしたら、「子どものせいでこっちが怒られる」と矛先が孫に向くことだってあります。

＜夜の寝かしつけに「お話」を＞

孫を寝かしつけるチャンスがある方にオススメなのが「むかしむかし、あるところに…」というお話です。孫の名前や親の名前を入れて脚色したり、「新作」を語ったりするのもいいですね。昔から「語り部」は年寄りの役割でした。

＜孫の心のオアシスに＞

いよいよ小学校入学。「しつけ」だけではなく、親は子どもの「教育」でいろいろ悩むものです。子どものことが心配で、親が怒る場面も増えるでしょう。三世代同居が多かった時代、親に怒られると、子どもは祖父母の部屋に逃げたものですが、核家族化が進み、今の子どもたちは昔のような逃げ場がありません。「甘やかさないで！」と親は言うかもしれませが、子どもにとって「甘え」が受け入れられることは必要なことです。

親はしっかり育てなきゃと思うあまり、肩に力が入って、ついつい厳しくなってしまいます。祖父母は、そんなときの『ちょっとした逃げ場所』…それが、子どもの心にとって必要なのです。

祖父母が甘いからといって、子どもが親より祖父母を選ぶということはありません。自分たちは孫にとっての「心のオアシス」だと思って、たっぷり甘えさせてあげましょう。

＜長寿時代の孫育て＞

現在、孫を見ることができるのは男性が約59歳以降、女性が55歳以降と言われていますが、平均寿命が80歳を越えた今、孫育てにも大きな変化が起こってきました。以前の寿命はせいぜい孫の学童止まりでしたので「かわいい、かわいい」と孫のすべてを受容していればよかったのですが、長寿社会では、孫が思春期を迎えてもますます元気という祖父母が増えています。『教育ジジ・ババ』として、孫を直接指導しようとする祖父母も少なくありません。

けれども『思春期』は大変な時期です。壮年期の親でさえそれを受け止めていくのは結構困難です。気持ちはあっても、体力・気力で劣る祖父母がその怒涛を受け止めようとすることから来る、孫とのトラブルも目立ってきています。

孫を育てるのはあくまでその親だ、ということを忘れることなく、孫との長い付き合いを楽しめたらいいですね。

＜「育児なし」の父だったのに…＞

生き生きと「孫育て」をしている夫を見て、複雑な気持ちになる方もあります。自分の子どもの世話なんかなにもしなかったのに…全部…私に任せきりだったのに…と。つい嫌みの一つも言いたくなります。

言いたかったら言いましょう。30年遅れでも、子育ての大変さや辛さを夫に味わわせてくれた「孫の存在」に感謝しましょう。

＜祖父母の最大の仕事は、老いていく姿を子どもに見せること＞

祖父母との関わりの中で、子どもは人が老いていく過程や、病気、死といったことについても学んでいきます。命を粗末にする若者が増えているのは、身近な死を経験してないからではないでしょうか。何もしなくても、祖父母は「存在しているだけ」で意味があるのです。

岐阜県「孫育てガイドブック」（平成２２年）